
名前のない小説 2

中村美紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名前のない小説 2

【Nコード】

N6984S

【作者名】

中村美紀

【あらすじ】

ここは20xx年。

ゾンビタウン、東京。

主人公、中村美紀は・・・ゾンビタウンで暮らしていた。ゾンビを殺して生きている人を助けること。ある日、男の子を見つけ・・・

人と出会いで、別れ、裏切り、恋愛、真実、嘘、失恋。

歯車は回ったばかり・・・

プロット・サリン (前書き)

よろしくお願ひします！
新作です。

ブロッド・サリン

『はあはあ！』

ココは何所

何で、逃げなきゃいけないのよ！

『うりゃあああああ！バンバンバン！』

何でワタシが銃を持って……

人いえ……ゾンビを殺さなきゃいけないのよ！
なぜよ……。

そう、一ヶ月前

事件が起こった。

私は、普通に学校に行こうと思って……外を出ると。

あたりは人が殺しあっていた。

首を噛み千切りあい、それはまるで動物。

すると、その人たちがこっちを見ると……私を襲おうとこっち
に来る

それが、始まり。

私は、一歩も家に出れなかった……どんどんあいつらが集まる。

怖い……！

すると、下の窓が壊される音がした。

もう、ダメだと思ったとき……私のそばに……ちょっと長い鉄
があった。

そして、私は決心した。
戦おうと……もしかしたら、まだ生きてる人がいるのかもしれないって。

『なっ！……もう、弾がない……！クソ……やっぱりこれね』

私は、銃を出し
敵に走りながら……殺す！

第一話 アンタ何者？

私はいつも通り、街で戦っていると……
一人の金髪の男の子が車の中で気絶していた……私はすばやく、
その子を家に運んだ

『はあく……もし、コイツがゾンビだったら……真っ先に殺そ
う』

そう口にしていたら、彼が目を開けた
私は、すばやく銃をだした。
すると、彼はこつちを見て……
驚いた顔していた。

『……アンタ、日本語わかる？って日本人だよね』
すると、彼が口を開いた

楓「……水……ください」

私は、コップに水をいれ
彼に渡した。

すると、彼は・・・水をまじまじと見て・・・それを飲んだ。

『ねえ、名前は？』

楓「・・・俺の名前は、楓」

『楓ね、私は美紀・・・よろしく』

私は手をだしたら、彼は・・・

楓「助けてくれて・・・ありがとう。何その手」

『握手』

楓「・・・握手なんかしねーよ」

彼は、私をまじまじと見た。

下から上へ

上から下へ

すると、家に帰りたいとかいいだした。

『はあ？・・・あんた、家に帰りたいつて・・・バカ？』

楓「バカじゃない・・・にしても、何でそんなに汚いんだよ・・・
風呂とか入れよ」

『うるさい・・・だいたい、外の出来事をしらないの？・・・ゾン
ビが群れてるのよ!』

楓「はあ？頭いかれてるの？・・・そんなこと信じるわけも・・・。

┌

『んなら、外にでろ』

楓「・・・はあ？俺まだ・・・」

『外にでてみるっていつてんだよ!!!!』

彼は、びつくりした顔で・・・私をみていた。
そして、彼を連れて・・・外に出た。

彼は最初はびつくりしていた。

周りや

人々や

何もかも

家に戻ってきたら・・・彼は、ずっと黙り込んでいた。

私のベットによこになり・・・何かを考えるように

私は、彼をそつとして置いた。

翌日、私は朝ごはんを作ろうと・・・起きたら、彼が何かを作っているのに気づいた。

『んう・・・？』

楓「起きたか・・・飯作っておいた。」

幸い、この家には電気がついていて
ゾンビも近寄らないところ。

だから、普通に睡眠できるし・・・私のアジトである。

『あ、ありがとう・・・』

楓「風呂入ってくる・・・服・・・たのむ」

そついい、彼は風呂場に入った。

私は、上の部屋にいき・・・男用の服がないか探した。

楓「・・・ふうーまさか、男用の制服があったとは・・・」

『ちょうど、上の男部屋にあったの・・・そのガクラン』

私は、彼のガクラン姿まじまじと見た。

そして、私も風呂入ろうと・・・した時だった。

楓「おい・・・」

『ん？』

楓「昨日は、ごめん」

『・・・え？・・・うん』

初めて彼が、謝った時だった。

彼はころころと性格が変わる神経なのか？

にしても、料理上手だったし・・・風呂なんて・・・特殊なのに、
使いこなせるなんて

あいつ、何者？

私はそう思いながら、風呂場に行った。

プロット・サリン (後書き)

漢字間違いがあれば、感想のほうへ・・・書いてください。

第2話 メガネ 第3話 少女（前書き）

ここは20xx年。

ゾンビタウン、東京。

楓と暮らし始める美紀。楓にはびっくりするものが多かった。
そして、新たな女の子発見するが……。

第2話 メガネ 第3話 少女

第二話 メガネ

ワタシが風呂からでたら、いきなり私を、見て……こう言い出した。

楓「武器……」

『……武器？……あ、そうだ。なかってね……後で』

私は、自分の部屋にいき……乾いた服を着る。
あいつには……何の武器がいいのかしら
そう考えてると、彼の声がした。

楓「……いい体だな」

『え……！？／／／／／』

彼が、部屋中にいたのだ……。
しかも、まじまじに体をみている……へっ……変態！

『変態！何所かいけ！』

楓「早くしてくれ、俺も早く安心したいんだ」

『とりあえず、部屋から出る！／／／／／』

彼は、はいはいといいながら部屋を出た。

数分後

私と彼は、地下室にいた。

地下室は、ワタシが集めた銃や刀がある。
でも、まだまだ街にはある、だから私はまだ全部集めていない。

楓「ふーん・・・ここか、いつばあるな」

『3個まで、後はダメだ。』

楓「・・・いいよ、よし・・・」

彼は、いろいろ見ながら・・・長い刀とナイフ・・・とメガネ？

『メガネ・・・何でここに』

楓「メガネは、昨日外に出たとき・・・店で見かけて・・・盗んできた」

そして、彼はニヤと微笑む

初めて、私は胸が熱くなった。

『そっそうか・・・よし、いくぞ』

楓「それっ・・・。」

『!・・・はっ』

私はナイフをすばやくよけた。

彼は、ニヤツとした。

楓「反射神経すごいな。」

『・・・こんな、暮らしたら・・・自然に身につけるわ』

楓「そう」

私は先に、上にいった

今日は夜に、外を出た。

た。

楓「よし、いっか」

『うん・・・車、お願いね・・・』

彼は、車に乗り・・・さつさと、家にもどった。

私は、ゾンビを殺しながら・・・武器の探しへ

あのと、武器探していなかったら・・・この子を見つからなかったかも。

・・・・・・・・・・・・・・・・

第三話 少女

古いビルを探索していると

一人の女の子の鳴き声があった。

そこに向くと、私より一つか二つ下の子がいた・・・

となりに、ゾンビに噛まれたその子の母親の姿があった。

私は、その子に駆け寄った。

母親はもう、ダメだ・・・なんとしてもこの子を！

すると、母親が・・・私の手を取り

こういった。

母親「彼女・・・を・・・おね・・・がい・・・し・・・ますっ」

『・・・はい』

少女「お力あーさん！嫌だ！・・・いやああだあああ！」

彼女は叫びはじめて・・・
これじゃ、やばい・・・にげなきゃ！

『早く！・・・ここもやばい！』

少女「いやよ！私はお母さんといっしょに！」

『バカ！アンタもゾンビになりたいの！?!?!?!』

すると、彼女は黙り込み
立ち上がった。

私は、その子の手を引つ張った。

彼女を引つ張りながら・・・私は、走って家に帰った。

家に帰ると、楓がいた。

『ただいま。』

少女「・・・邪魔します」

楓「おかえりー・・・って、新しい子かな」

楓は、微笑みながら迎え入れる。

彼女は、彼を見てほっと・・・したのか・・・玄関で倒れてしまっ
た。

私の部屋で休ませていると・・・。

彼がやってきた。

楓「晩飯・・・まだだろ」

『あ・・・ありがとう』

彼は、おにぎりを作ってくれて・・・

それを、私に渡して・・・もう一個は彼が食う。

私は、ひさびさに米食べた。

『おいしい……。』

楓「そうか……。よかった。」

そしたら、彼がいきなり……。私の手をとった。

楓「何だよ！これ……。傷だらけじゃん！」

『えあ……。うん。日にちがたてば消えるから』

すると、楓がしたにむかった……。その時、女の子が起きた。

『大丈夫？』

少女「んう……。おかあ……。さんは？」

『……。ごめんなさい』

少女「！……。何で！何でたすけなかったの！」

彼女は、またないてしまった。

そして、私をみて……。

少女「ゆるさない！アンタなんか死んでしまえ！」

私は、シヨツクのあまり……。何もいえなかった。

すると、パシンと音が聞こえた。

それは、楓が彼女の頬を叩いた音だった……。

少女「何するのよ！」

楓「謝れ……。助けてもらった人に、今すぐあやまれ！……！」

彼女ははっとしたような顔で、私を見た。

今私の顔はどうなってるんだろう……。

あれから、沈黙が続いた。

楓は私の掠り傷を消毒していた。彼女は楓を見ていた。

私は、口を開いた。

『お母さんのことは、ごめんなさい。かまれた時点でもう、ダメだったの』

少女「……もういいです。私こそ、ごめんなさい」

楓「俺も、ごめん……頬痛いだろ」

3人と謝ると、また沈黙。

そしたら、楓が……。

楓「なあ、お前の名前は？」

理奈「私の名前は理奈」

『私は美紀、こっちが楓』

すると、彼女は彼をみて……ニコツと笑った。
もしかして……。

「楓って言うだあ、外国人だと思った」

「あのなあ、俺はそんなに外国人に見えるか？」

数分後たつと、2人で盛り上がってる。

何か、心が元に戻る気がした……。

第2話 メガネ 第3話 少女（後書き）

漢字間違いありましたら、感想のほうへお願いします。
別に一言のところでも、お願いします。

第4話 私の心&新たな男の子 第5話 新たな恋心(前書き)

ここは20xx年。

ゾンビタウン、東京。

離れていく恋心、胸の奥がちくつといたくなる。

そして新たな男の子登場、だがその子は前告白した相手で……

第4話 私の心&新たな男の子 第5話 新たな恋心

第四話 私の心&新たな男の子

数日後、彼女は武器室に行き、武器を選んだ。

彼女は大きい鎌と、ポケットにハンドガン二つ。私的にはいいチョイスだと思った。

選び終えて、彼女は彼にべったりくっついていて。まるで恋人。

理奈「ねえ、これはどうやって・・・？」

楓「知らないで、選んだのか・・・馬鹿だな^^」

理奈「なっ、ひどい」

私は、自分の部屋に閉じこもった。何か、行くきがない・・・。

私の心にある感情がめばいていたのだ。

それは・・・

『恋』

昔、私はある人に恋をして・・・いた。同年代の幼なじみ。だけど、彼は私を嫌っていた。告白の時
も・・・。

『つつつきあってください！』

彼「・・・嘘だろ？ごめんな、アンタみたいな人タイプじゃないし。」

今でも、思い出すとナミダが出る。すると、私の部屋が勝手に開く。

楓「ちよつごめん．．．どつどつした？」

『なっ、何でもない』

私は、ナミダを拭き。部屋を出る。さあ、今日は探索しないと．．．
もう、会わないと思っていた．．．。

『今夜、私探索いつてくる。』

理奈「え、、大丈夫なの！？美紀さん！」

楓「大丈夫、こいつは．．．ベテランだから」

彼は、彼女に微笑む。何ニヤニヤしてるのよ．．．馬鹿。私はさつ
さと食事を終わらせ。立ち上がると楓が．．．。

楓「大丈夫か？」

『大丈夫、アンタは理奈とここにいて』

楓「．．．．．わかった」

私は、さつさと家を出た。

夜の探索は初めてである。今夜は満月。

月の明かりが、街を照らす。私は鋏をもち歩いていた。

すると、銃弾の音がした。私はそこに向う。人間！人間がまだ．．．
．．．。
そこには．．．．．

彼「バンバンバン！限がないな！この！」

銃で、うって．．．木刀を自由自在に振り、ゾンビを殺している。

・・堅一がいた。
私が、あまりにひさびさで、見ていると。後ろから二匹のゾンビが襲い掛かる。

『・・・・・。っ！やっ！！！』

堅一「だっ・・・美紀！このやろっ！」

すると、彼は瞬間に二匹のゾンビを殺す。

私は、後ろを向く・・・早い。その後、私も加わり、ゾンビ殺しをした。

堅一「・・・・・。」「
『・・・・・。』

私は何も言わないで、道路を歩いている。彼はただ、ついて来る。空はもう、明け方だ。

私が、空を見ると、彼が口を開く。

堅一「お前、今何所に住んでるんだ？」

『・・・・・家』

堅一「そうか、俺は、これで帰るよ」

彼は、違う方向の道に行く・・・。私は、彼についていった。私何してるんだろう。

彼は何も言わず、アジトに入れさせてもらった。

楓サイド 彼の心

「美紀さん、遅いですね」

『そうだな・・・』

彼女のナミダのをみた時、胸がくるしくなった・・・。
何だこれは・・・今、思い出してみると・・・まだ痛む。
すると、理奈が俺の顔を覗く。

理奈「楓？」

『・・・っん？ごめん・・・ちよつと考え事』

朝食を食って、俺は彼女をまっただ・・・
俺は頭の中でケガして帰ってこないとか、ゾンビ化してしまったと
か・・・いろいろ考えていた。
そして、ふと思った。最近俺は、彼女に。すると、理奈が俺の膝に
座り・・・唇にキスをした。

理奈「んっ・・・」

『んん・・・』

俺は・・・最低な男だ。

体も汚れている。

美紀、これでも・・・俺を愛してくれるか？

.....

第五話 新たな恋心？

堅一「ただいまー。皆無事か？」

お爺さん「おおつ、堅一か、、おかえりなさい」

そこには、何十人と大人や子供がいた。皆無事だあ……。
私はキヨロキヨロしていると、堅一が私を見て……微笑む。

堅一「何、お前……きもい」

『きつきもいつて何よ！……きもくは……っ』

私は体がいきなり、倒れた……頭が痛い……。

そっだ、、私熱があつたんだ。私はゆっくりと目を閉じた。何し
てるんだろう……私。

(「キミはボクのモノ」)

何か、体がふわふわしてる。何これ、私はちょっと目を開けた……。
すると、隣に子供が私を見ていた。堅一が入ってきた。

堅一「大丈夫か？」

『えあ……うん』

私は起き上がると、堅一が手を差し出した。

堅一「まだ、起きるな……少しは休んでおけ」

『いい……帰らないと』

すると、彼の手が私の手を握る。私は顔が熱くなった。
彼はとてもいい人、昔から変わってない。

『なっ／＼／＼』

堅一「まだ、寝てる。明日送ってあげるから……。いつそうなら、」

私は、彼の顔を見た。子供たちが、私と堅一を見て叫んだ。

少年「おじいちゃん！堅一お兄ちゃんが！」

少女「お姉ちゃんにコクハクしてる！」

『え？？？』

いやいや、子供よ……。これは告白じゃないぞ。

私をフツと笑い、目を閉じた。ちよつとぐらいいいよね……。失恋した後、私は毎晩泣いた……。ナミダが枯れるほど……。そして、彼が嫌いになった。

その後、ゾンビが……。ゾンビが……。

「美紀！クローゼットに隠れなさい！」

『お父さん！うわっ！』

硬く閉められた、ドアは……。数日たっても閉まったまま……。だった。

ドアの隙間には……。

『はあっ！……。つ……。』

お爺ちゃん「おきたかい？」

隣にお爺ちゃんがいた、やさしく微笑み。私を見ている。

私は起き上がり、顔をさわった。

お爺ちゃん「すごく、魔されていたが……。大丈夫かい？」

『はい・・・大丈夫・・・です。』

その後、私は外に出た。

いい天気・・・。私がアクビをしていると。さっきの老人が私の武器を渡しに来てくれた。

お爺ちゃん「本当にいいのかい？」

『はい、、また、来ます。あれ？・・・綺麗になってる』

お爺ちゃん「あ、、ああ、これは。あまりに汚くて洗って磨いだのだよ、にしてもでかい鍬だね」

『あつありがとうございます・・・はい・・・。』

私の相棒。この鍬は私、鍬は私。私は老人に別れ、道路を歩いていると目の前に。

堅一が立っていた。

堅一「あ、来たか。美紀送るぞ」

『え・・・いいよ、別に』

私は彼を見つめた。堅一・・・。

すると、彼は私の腕をとり。胸に押し込む・・・。鼓動が早い・・・。

堅一「・・・いつでも、来いよ。まってる。」

『うん・・・ありがとう、皆をよろしく』

そして、私は彼の頬にキスをした・・・。

第4話 私の心&新たな男の子 第5話 新たな恋心(後書き)

漢字間違いあったら、感想でも一言でも書いてください。
よろしくお願ひします。

第六話 悲しい出来事 第七話 本当の気持ち(前書き)

ここは20xx年。

ゾンビタウン、東京。

家に帰ってきた美紀。だが、部屋に向うと信じられない光景が・・・

・
楓がついに動き出した(?)

そして、彼はいやいや起きた。
彼は私を見て、びっくりしている。
私は、部屋を出て台所にいった・・・
コップに水を入れて、いきよいよく、飲み干す。

『はあはあ・・・はあ・・・』

(胸が痛い・・・)

私はその場にしゃがんだ・・・。
彼は彼女とやった・・・

(ヤツタノハ、カノジヨノ証)

ある本で私読んだことがる。雑誌でやったら、もうその子は彼(彼女)の物だと・・・。

(「ねえ、なぜキズイテクレナイ?」)

すると、階段をいきよいよく降りてくる音がし、誰かがこつちに来る。

それは、楓の姿だった・・・

楓「美紀！おかえり！」

『なっつわ・・・』

すると、私に抱きついてきた。

(彼は・・・)

私は彼を突き飛ばした。楓はいきよいよく、壁にぶつかる。

楓「いてて……」

『さわらないで、もう優しくしないで……!!』

私は言った後、地下室に向った。

(もう、胸が張り裂けそうだよ……。)

数時間後、私は上にあがった。

テーブルにおにぎりがおかれており、手紙があった。

美紀へ

これを、食べてください。ちょっと出かけてきます。

楓より

私は、一口おにぎりを食べた。

(おいしい……)

ナミダがポタポタ落ちて、そのせいか、すっぱい。

その後、事件が起こった。

(楓、あなた……馬鹿なの!?)

.....

第七話 本当の気持ち

理奈「美紀さん！楓が！！！！！！」

『え？？？？どうしたの？』

楓と理奈が家を出て、数分後・・・理奈だけが帰ってきた。

理奈はすごく、怯えてはあはあと言っている。

（走ってきたのか？）

「楓が・・・楓が・・・飛び降り自殺を・・・。」

『・・・はあ？何でまた！』

私は理奈と急いで家を出た。

道路を出ると、ゾンビが多くなっている。私は走りながら、殺すが

理奈は怯えていて・・・

理奈「いやっ！来ないで！」

『理奈！走りながら・・・！あっ！美香にとって、これなら殺せるて物、やつある？』

彼女はまだ、殺せないのだ。一から教えないと・・・。

そう言うと、彼女は私の名前を言った。

理奈「アナタ、アナタなら殺せる」

『・・・・・・・・。あつアタ！？なら、ゾンビを私と思い殺して！おk？』

理奈「おk！」

すると、彼女は鎌を降り飛びながら殺している。

銃を頭の横に。私はまだ笑ってる。
これで、もう終わり。

『だけど、死んでほしくない。だから……』

私は、走って楓の目の前で走る……。
そして……

『楓、好きだよ……。』

楓「っ！……み……き！」

バン！ドス……

私は、楓の銃を取り上げ、楓を抱きしめた。強く……強く……
美香が叫んでる、だが声がどんどん遠くなる。
そして、私は……

起きたら、綺麗な空だった。

(夕方のようだ)

起きると、地面が水で、回りが何もなしところ。

(……は……何所?)

楓サイド

楓「……ついてえー……美紀?……血……?」
理奈「楓!美紀……さん」

すると、彼は美紀をだっこし、俺らを見て『ついてこい』といい走った。

俺らはただ、ついて行くしかなかった。

美紀サイド

もうずいぶん、歩いた。

でも、なかなか・・・つかない。人もいないし、ゾンビもない・・・ただ水と空だけ。

すると、空から声が聞こえる・・・

それは、美香と楓と堅一と老人の声だった。

堅一「お祖父ちゃん！美紀が銃に・・・。」

老人「なんじゃと！すぐに、ここに横にさせなさい・・・お婆ちゃん！手伝ってくれないかい！」

老婆「はいはい。お祖父ちゃん、どうしたんだい」

それは、何かあったような・・・でもうまく聞こえない。テレビの嵐が混じって聞こえない。

老人「その2人はなんじゃ？」

堅一「美紀といつしよにいた、人です。」

老人「いったい、何があったのかい？」

すると、がたんといい・・・何も聞こえなくなった。

(何があったの・・・?)

そして、私はまた歩く。そろそろ夜だ・・・

楓サイド

理奈が全部話してくれた、廃墟で何があったのか・・・俺が自殺しそうになったこと。

すると、彼はそれを冷静に聞いてくれた。俺は、何もいえなかった・・・。

(全部俺が悪いだ・・・)

堅一「っで・・・お前の、名前は？」

理奈「えーと・・・理奈です」

堅一「おい、お前は。さっさと言えよ、な・・・。」

彼はものすごく、怒りをだすのをためている・・・。

俺は彼を見て・・・いった。

楓「楓・・・。」

堅一「・・・楓、か・・・お前か。」

楓「・・・？」

彼は、顔をあげ・・・俺を見た。

それは真面目で目をまっすぐ俺の目をとらえている。そして、口が動く。

堅一「・・・美紀が、もし助かんなかったら。俺はおめえを恨む・・・だが」

彼は苦笑いし、言った。

堅一「美紀が嫌がることはしたくない、美紀は言うだろう」「私は大丈夫、人を恨まないでって」「てな」

俺は、目からナミダがこぼれた。

(俺は許されたのか?・・・)

胸に溜め込んだ水が目から出る。俺は美紀が好きだあ、だが俺は・・・。
すると、理奈が俺を見て・・・涙目で言った。

理奈「ごめんね楓。もう、あんなことしないから・・・だから・・・」

俺は、そんな美香の音が聞こえなかった・・・。

彼は俺の背中をさすった。美紀・・・どうか、助かってくれ・・・生きて俺のは言いたいことがあるんだ。

美紀サイド

『あ、また・・・声が・・・』

声は皆声だった、生きてとか戻ってくれとか・・・。

(戻る?どうやって・・・私も戻りたいけど)

私は周りを見た、すると上から一つも鉄が落ちてきた。

(私の相棒・・・)

『相棒・・・ココは何所?』

すると、鋏がかたかたと動き・・・どっかに走っていく。

(まっまって!)

私はそれを追いかけた。鋏が早い、私は転びながらも走った。すると、明かりが見えてきた・・・

「まっまって!!!!!!」

私は手をかざして、光の先へ

老人「おお!生き返ったぞ!」

堅一「!」

楓「えう!」

理奈「!?!」

『はぁ・・・』

私は目を開いた。周りに皆が集まっていた。

動こうとしたら・・・横腹が痛んだ。

『っ!・・・いたぁ・・・』

老人「動くじゃないよ・・・まだ、傷がふさがったばかりだからな」

『傷?・・・』

堅一「大丈夫か?美紀」

すると、堅一が心配そうな顔で私を見た。

(いったい何が・・・あったの？)

私は問いかけようとしたが・・・
そろそろと、人があつまってきた。

『んま・・・大丈夫』

堅一「おい！楓、こっちこいよ」

すると、楓と理奈が来た。楓は私を見てほっとしたのか、私を抱きしめた。

(彼の体は暖かい・・・)

堅一はお爺ちゃんに呼ばれて、部屋の奥にいつてしまった。

『楓・・・無事でよかった』

楓「・・・ごめん・・・な・・・。俺はお前を・・・。」

理奈が大きい声で、「ごめんなさい！」といい・・・楓が私の体に離れた。理奈は私の手を握り。
こっぴった。

理奈「アタシがいけないんです！楓を無理やりやらせて。」

『・・・無理やり？』

私は、首をかしげると・・・堅一が「楓！美香！」といい、私に銃をむける。

(え?・・・なっなに!?)

すると、老人が叫びながらこっちに来た。

老人「堅一!最後まで聞くじゃ!」

堅一「でも!いつ、ヨミガエルかわからないでしょ!」

(よみがえる?なのこと?)

すると、楓と美香は私に離れた。

とりあえず、私何がおこってるのか聞こうとした・・・

老人「この子わじゃ・・・まだ、ハーフなんじゃ!」

堅一「この化け物っ!え・・・ハーフ?」

第六話 悲しい出来事 第七話 本当の気持ち（後書き）

はい、続きます。

漢字間違いありましたら、一言とか感想のほうへお願いします。

第8話 真実 第9話 決心&18歳(前書き)

ここは20xx年。

ゾンビタウン、東京。

真実を知る美紀たち、その直後・・・何かに襲われる。

そして、何もかも思い出すことになる美紀。そして何かを決心する

第8話 真実 第9話 決心&18歳

第7話 真実

化け物……。

ハーフと聞いた瞬間。周りが静まり返った。ハーフ？二分の一？すると、老人は私に近づいた。すると、私の髪の毛をめぐり……何かを見せる。すると、周りは騒ぎ始める。

「もしかしたら、この子はあれを作った……子供かもしれん」
『お祖父ちゃん？……首に何か？』

老人は私の目をはつきり見て、言った。

「君は、ゾンビの血と人間の血が入った……ハーフの子なんじゃよ。」
『……へえ？』

私は、一回自分が……聞き間違ったと思い。苦笑いをして……。

『嘘でしょ……？冗談やめてくださいよ……あははは』
「いや、本当なんじゃ……首のこの小さな三角やつ……その証なんじゃあ」

嘘でしょ……。たしかに、小さな三角はつてるけど……ホクロだとおもって……。私は頭が混乱し。
手で、それを触る。そしたら……。映像が流れる。

忘れていた、記憶が全部流れた。何もかも……。自分の親、なぜ、

、あんな物がでてきて・・・私たちを襲うのか。
私は、目をつぶり・・・。それを受け止めようとした・・・すると、
誰かがでてきた。

「キミはボクのモノ」

「ねえ、なぜキズイテクレナイノ？」

「キミがそうするなら、ボクは・・・キミを」

すると、殺すとゆう声が聞こえた。皆を見た・・・。皆叫んでる・・・
あれ、皆？

楓が私を呼ぶ声も、美香が私の手を掴んで放してくれない・・・。堅
一は銃を黒い人を打ちながら・・・私を呼んでる。

何？何が・・・私の左目が、熱くなった。そして・・・

『・・・とーりゃんせ、とーりゃんせ・・・』

「美紀さ・・・ん・・・ひい！！！！」

私の体の中で何かが騒いでいる・・・なんだろうこれ・・・は。す
ると、私は黒い人に向かい・・・。

『こいつはどーこのホソミチっ！じゃ〜』

私はどんどん、殺していく・・・血がでて関係ない。怪我しても、
関係ない。だって私は・・・作られたオモチャ（ゾンビ）だもん。
そして、全部殺した後・・・皆私を見ていた。私は今、どうなっ
ているんだろう・・・。楓が私を見て、近づいてくる。やめろ、来る

楓「・・・おはよう」

『!?!?!...あつ・・・楓』

私はそつと起き上がり、腹を触った。

やはり、包帯が巻かれている、そして肩にも包帯が巻かれていた。

(三角を隠すように)

『・・・やっぱ、あれは。』

楓「あのさ、美紀と堅一との関係はどんな感じなの？」

『えっ・・・?』

起きて、その話題ですか・・・。

私は、楓を見ていった。

『うん・・・友人?』

楓「ふん、友人ねえ」

『?』

まったく意味がわからないですが？

まじいいか堅一にお礼言わなきゃ、あとお祖父ちゃんに。

ん?どうやって服・・・家に帰って来てたんだけ?

私は、楓に質問しようとしたとき・・・ドアがノックされた。

びっくりし、シーツを握った。ドアはゆっくりと開けられた。

堅一「あつ美紀、おはよう・・・ご飯食べるか?」

『えっ・・・うん、でも何で堅一がいるの?』

楓「あそこはもう、使えないらしい・・・だから、こっちに來たら
しい」

あそこがもう・・・あつ黒い人が来た時。
脳裏に映像がまた流れた。

『なつなるほど・・・お祖父さんいるよね』
堅一「ああ、いるが」

『あとで、お礼言っておかないと・・・。』

すると、むくつと理奈が起きた。

私の顔を見て、何かを勘ずいたのか頬を触った。

理奈「何所か危険なところ、いくんですか？」

『ええっ？ううん行かないよ・・・。』

苦笑い・・・。

そして、私はどんどん復活していった。

1年経ち、私は18歳になった。

この意味は私にもわかっていた・・・

私はあと1年で強いオモチャ（ゾンビ）になってしまっただけ・・・

・
そして、ブロード・サリン社がもうじき・・・私を取り戻しに来ること
とを。

第8話 真実 第9話 決心&18歳(後書き)

どうでしたでしょうか。。。。

漢字間違いがありましたら、一言でも感想のほうへ書いてください

次はエピソード2にいきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6984s/>

名前のない小説 2

2011年10月9日00時38分発行